# 「弥生町」

写真学科　吉野弘章　Hiroaki Yoshino

「弥生町」の名前の由来は、弥生時代の遺跡がいくつか発掘されたことによる。戦前には弥生土器が出土したこともあるそうだが、残念ながらそれらは今日まで伝わっていない。一説によれば、太平洋戦争中の空襲で焼失したとされる。

2018 年の夏、東京国立博物館で開催された「縄文」展は大いに話題となり、多くの来場者を集めた。「縄文」の次は「弥生」ブームがくるであろうと、新しいこと好きの私は、故きを温ねて、新校地となった弥生町へと調査に赴いた。

かつて駐車場だったその土地は、すでに埋蔵物調査や地盤調査のために所々が掘り返され、どこか殺伐とした趣を漂わせていたが、私は根気よく、掘り返された土砂の中に時間の化石を探し求めた。

丹念に地面を見ながら歩いてみると、アスファルト舗装にボーリング調査のために空けられた直径 30 センチほどの丸い穴がいくつもあることを発見した。それらはすでに埋め戻され、まるで過去へのアクセスポイントの痕跡のようになっていた。

そもそも写真とは遺跡の製造装置のようなものである。いまここに存在する人々の営みが写真となって未来へと伝えられる。そのような意味では、写真は常に過去と未来との境界面である。

もう一年も経つと、この土地には新しい校舎が建ち、現在の地面は跡形も見えなくなるだろう。これらは写真と現在を重ね合わせながら、未来を想う作品である。

※ 本作品は、川島崇志氏の「Doorgang 通路」展にインスパイアされて制作したものである。

1965 年 東京生まれ。東京工芸大学大学院芸術学研究科修了。
1980 年代より写真展の企画、作家のマネージメント、オリジナル・プリントのディーリングなどに携わる。2003 年に日本写真協会新人賞、日本写真芸術学会賞を受賞。専門はアート・ディーリング、マーケット史、写真編集、エキシビション・デザインについてなど。